
I S＜インフィニット・ストラトス＞～アナザーストーリー～

シグマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS＜インフィニット・ストラトス＞アナザーストーリー

【Nコード】

N8564S

【作者名】

シグマ

【あらすじ】

IS。インフィニット・ストラトスと呼ばれる世界最強の機動兵器。それが作られる前に三人の男女が出会った。佐野遼平・織斑千冬・篠ノ之束。彼らが出会ったことで徐々に世界は変わっていく。※相変わらずの駄作者の新作です。今回は、主人公は技術屋です。ただし、ISが魔改造される可能性もあるので注意してください。現在、第1部としてIS登場以前の時系列です。

第1話 三人の天才（前書き）

過去編では、佐野遼平が主人公です。ヒロインは……束さんか千冬さんのどっちか。ただし、束↓佐野↑千冬みたいな感じになるかも。理由は本編で

第1話 三人の天才

後の世界において、『鬼才』佐野遼平、『天災』篠ノ之束、『世界最強のIS操縦者』織斑千冬と称される三人。

三人の出会いとは簡単な物。三人が通っていた小学校で佐野が見ていた設計図に束が食いつき、束に着いてきた千冬も話すようになったという簡単な物。

「りょーへーってさ。なんでテストとかの成績が悪いの？」

「興味がないからだ」

「おまえ……」

ぶっちゃけて言うと、この時はまだ束も普通だった。精精、テストができる女の子という感じ。しかし、佐野は違った。テストこそ真面目にしていないが、読んでいる本などは明らかに大学生や専門家が読むような難しい本ばかり。子供に限らず人間は自分と違う存在を排斥する。そして、その方法は子供のほうがひどい場合がある。

「ちーちゃん」

「……」

束たちが知っただけでも、佐野に対するいじめはひどかった。だが、佐野はそれらに大してなんの対策も講じなかった。そのことを聞いてみたら――。

「興味のないことに意識を向けるのは面倒だ」

この時、束も千冬も佐野の行動理念を知った。『興味が有るか無いか』ということに。佐野が徹底的に無視をしていたのでいつしかいじめもなくなっており、また設計図に口を出してきた束と千冬に興味を持った佐野が若干丸くなったため、友人もそれなりに増えた。

「そういえば、遼平。お前のご両親は？」

そして、いつしか佐野・千冬・束で行動することが多くなり中学も同じ所に行きそれなりに普通に生活していた。そして、ある日の事。束と千冬が佐野の家を尋ねたときに二人は少し異変に気づいた。佐野の家は高級マンションの一室で一人暮らしをしている。だが、親の写真なりなどが無いのだ。それを不審に思った千冬が佐野に聞いてみた。

「さあ？　興味がないな。というか、奴らも俺に興味はないだろう」

佐野曰く、「あの二人はただ血が繋がっているだけの他人」らしい。千冬と佐野の性格なども家庭環境などから来ているのではないかと推測するが、真実は分からない。束は佐野に感化されているのか、気にしていない。

「ねえねえ。これ、私が書いた設計図！　読んで意見を聞かせて！」

「ん」

そして、束は最近になって佐野のように兵器らしい設計図を書くようになった。千冬も束と一緒に設計図を書いたりしているが、どうも束の様子がおかしい。最初は、束が佐野に淡い恋心を抱いていて、気をひこうとしていると思った。いや、実際にそうなのだろうがどうも不安が拭えない。

「ちーちゃん。どうしたの？」

「いや、なんでもない」

束は元々、自分や両親、そしてできたばかりの妹と千冬の弟以外には冷淡な反応を示す。そして、最近束の『身内』の中に入ってきたのが佐野だった。

「（束の発言は私も分からないことがある。しかし、遼平はそのすべてを理解している。束は科学者になりたいと言っていた。つまり、束は遼平に自分を理解してもらいたいのか？）」

恐らく、初めてであった『対等以上に会話ができる人間』である佐野に自分の持つ『知恵』を知ってもらいたいのだろう。千冬はそう結論づけると二人の会話に何とかして入り込もうと頑張った。その結果――。

「ふむ。千冬は女にしては身体能力が優れているな」

「ま、待て！ どこを触っている！」

「脇腹や太ももだな。なにか問題が？」

「大問題だ！」

女性の体。しかも、脇腹や太ももなどは例え同性でも触られるのを遠慮したい部位。だというのに佐野は普通に触った。

「ちーちゃんの体ってどう？」

「ふむ。細身の割には肉付きがいい。ついでに、女性の股関節は男性より可動域が広いのだが、千冬は剣道をやっていたか？ とにかく、そのおかげかは知らんが通常の女性よりも可動域が広いと思われる。また……安産体型といったか？ そんな感じだ」

「なるほど」

「お前ら！」

千冬は改めて思い知った。佐野は異性の体を触っても何も思わない。だって『興味はないから』。多分、この調子なら裸を見ても『興味がない』の一言でスルーしそう。それはそれで負けた気がする。

「（あ、こいつらが仲良くなったのも理解できる。こいつら『似たもの同士』だ）」

程度・方向の違いはあれど、佐野と束は似ているのだ。だから、共感したのだろう。

「(待てよ?　つまりは、私の苦勞が増えるということか?)」

千冬の推測は当たっている。はからずも、この後も千冬はこの二人の引き起こす面倒事に巻き込まれていくことになった。主に、ツツコミな意味で。

第1話 三人の天才（後書き）

まあ、あれですわ。いつもの病気ですよ。

佐野は束さん以上の人格破綻者でもあります。とりあえず、原作時系列に行くのはもう少し経ってから。

その内、高原ハヤテも出てきます。それと、覚悟のススメの強化外骨格も名前と外見だけでできます。そこら辺はいずれ・・・

第2話 佐野、子供を拾う

「……」

カタカタとキーボードを叩く音がする。薄暗い部屋の中でパソコンのディスプレイの光に浮かび上がるのはボサボサの髪青年。ディスプレイの中には人が纏う鎧のようなものが映っていた。青年の名前は佐野遼平。高校1年生でありながらすでにいくつかの特許を得している『鬼才』でもある。

「……チツ。やはり…動力か」

佐野が現在作ろうとしているのは、紛争地域などで使用する『鎮圧用』のパワードスーツ。作った理由はただ単に幼馴染の少女二人との会話の中で出てきた『紛争などを止めるにはどうするか?』というだけ。その結果、佐野は『圧倒的性能を持つ兵器による対立陣営の戦闘継続能力を削ぐこと』という考えを導き出した。まあ、結局のところ動力などの問題で頓挫しているが。

「りょーへー。また『強化外骨格』の作成?」

「お前……せっかくのゴールデンウィークだというのに…」

いつの間にか自分が借りているアパートの部屋に入ってきたのは幼馴染の篠ノ之束と織斑千冬。両親が蒸発して以来、特許料などで一人暮らしをしている佐野の部屋はこうやって幼馴染たちのたまり場にもなった。だが、元々興味のある事柄以外には無頓着な佐野は、洗濯こそするが食事や掃除といった事柄はほとんどしない。そのため、週一の割合で千冬たちが佐野の部屋を訪れて掃除やらなんやらをしているのだ。駄目な男である。

「別に興味がないからな」

「はぁ……」

そもそも食事を基本的に取ることが少ないためゴミ自体もあまりでないが、一応現時点でゴミ箱にあるよく分からない書類をシュレッダーにかけてゴミ袋に入れていく。束はそんな書類を流し読みしている。

「束……」

「あはは。ごめんね。やっぱ、技術者の卵としては気になるのさ！」

「ゴミ箱に入っているやつは欲しければ持って行け」

ゴミ箱に捨ててあるものはもう必要ないのだろう。再び必要になったとしてもこの男はそれらの書類の中を全て知っている。『鬼才』と呼ばれる程の頭脳だ。覚えていてもおかしくないと千冬は感心するが、ここに来る前に友人に言われたこと。

『織斑さんと篠ノ之さんってだめんずうおーかー?』

この言葉が妙に胸にストンと落ちてきた。確かに、生活能力皆無の佐野の部屋に週一通っている自分たちはテレビでも言われている『だめんずうおーかー』に見えるのだろう。束はそもそも有象無象より佐野の方が気に入っているので気にしない。千冬も、どちらかと言えば幼馴染の世話をやくほうが好きなので気にしないが、周りから見ればそうなるのかと若干感心したりした。

「ねーねー。りょーへー。この『グラフィコンシステム』って何?」

「ん? ああ、簡単にいえば重力制御装置だ。理論上は完成している…だがエネルギー面での問題で実現化には後数十年以上かかる。アニメの核エンジン並の出力があれば作れる」

「へー……」

束は次々と佐野に質問していく。そのすべてが『エネルギーの問題を解決すれば実用化も可能』という佐野の答えが返ってきた。無論、全てを実用化するなど束も思っていない。佐野にしてみれば『もう興味を失った物』なのだ。再び、興味をもつことがあるならそれは『必要』に迫られてというくらいしか無い。

「お前ら…少しは掃除を手伝え！　　というか、遼平！　元はといえば、お前の怠慢の結果なんだ。少しは自分でやれ！」

「……はーい」

「……」

頬をふくらませてぶーたれる束と、千冬を一瞥しただけで再びパソコンに向かう佐野を見て千冬が切れた。

「お・ま・え・らー！」

束はやろうとしているので問題なし。しかし、佐野はやる気が無いようなので首根っこを掴んで無理やりやらせることにした。どっと疲れた千冬だった。

そして、ある事件が起こった。

「とりあえず…子供を拾った」

「「はあ!？」」

そう言って佐野が織斑家に連れてきたのは千冬や東の弟妹と同年らしい一人の少年。とりあえず、少年は千冬の弟である一夏と東の妹の箒と遊ばせておいて、千冬と東で事情聴取という形になった。特に東の佐野を見る目は怖い。

「（東…何故、目が単色？）」

千冬はそんな目をする東、そしてそんな目で見られても気にしていない佐野に恐れを抱いたが、とにかく話を聴くことにした。

「それで？ あの高槻光太郎と言ったか？ あの少年は何だ？ どう鼻屑目に見てもお前が子供を仕込むはずがない」

「当たり前だ。そんなモノに興味はない」

恋愛ごとを『興味がない』という一言だけで切り捨てる佐野に若干頭痛を覚えつつ、詰問を続ける。

「では、あの子供はなんだ？」

「この前、捨てられているのを見つけた。興味があったので拾った」

「……」

こいつは社会不適合者ではないが人格破綻者であると千冬は改めて思った。束が横で「なるほど。それなら仕方ないね」と言っているが、聞こえない。聞きたくはない。

「しかし…お前が興味をもつほどなのか？」

「あのガキ…俺が遊びで作って放置していた設計図を完成させた。面白いと思わないか？」

「なに!？」

千冬だけではなく束も驚いていた。佐野が放置していた設計図が何かは分からない。しかし、それを予備知識無しに完成させたというあの少年に佐野が興味をもつのも仕方のないことでもある。

「『強化外骨格』の設計図は俺自身も完成させたいと思っていた。予備知識無しに設計図を完成させたんだ。『強化外骨格』の作成にも役立つ」

佐野はそう言って笑った。佐野が笑うところなど二人は見たことがなかったのですごく驚いた。ただ、その笑い方が悪役ぽいのでときめきはしない。

「……りょーへー……」

「!?!」

約一名以外。

「それに、育てるだけなら俺にもでき「ウチで育てる」……まあ、構わんが」

そこだけは千冬が阻止した。こいつに育てさせればあの少年がどうなるか分からない。間違っても目の前の男のようにはしないと千冬は使命感に燃えていた。

「なあ、箒って一夏のことが好きなのか？」

「な、なななななな！？」

「凶星、と」

「何の話？」

ちなみに、光太郎はすでに一夏たちと仲良くなり、箒を弄っていた。

第2話 佐野、子供を拾う（後書き）

多分、第1部は時期不詳な感じで進んでいきます。とりあえず、次回ハヤテと慎吾が出てくる。この二人は、狂言回しみたいな万能キャラ（ギャグ・シリアス的な意味で）で行きたい。

ちなみに、ヒロイン希望みたいなものがあります？ あれば、感想なりに書きこんでいただければそれなりに考えます。

第3話 体を調べるだけの簡単なお仕事です。

「やめろオ！ ショッカー！ ぶっ飛ばすぞー！」

一人の青年が手術台の上で叫ぶ。必死に逃げようとしているが、鋼鉄製の手枷や足かせ、さらには首枷もはめられているため動くことすら難しい。叫んでいる青年は高原ハヤテ。現在、17歳という若さでありながら、すでに実力者の一人として知られている青年。日本一の勢力を誇るカウンターテロ組織『更識』の次期当主の婚約者候補の一人にも上がっている。そんな彼が現在いるのは、佐野の研究室の一室。周りには、佐野。ガラスで仕切られている隣室には千冬や光太郎、メガネを掛けている青年がいた。

「ちょっと待って！ 確か、俺達は佐野博士と契約の話に来ていたんじゃないかったの！？」

「ああ。俺と契約をしてもらう。それはそれとして『アンデッド』と名高い高原ハヤテのそのしぶとさのメカニズムを解析したいと思って。勿論、許可はもらっている」

「どこから！？」

佐野が指を指した方には、束から札束を受け取っているメガネの青

年——自分の相棒である斑目慎吾がいた。

『もう少し、色をつけてもらえませんか？ 私は、銃火器を使うのでいろいろと入用なのですが…』

『大丈夫だよ。りょーへーが結果次第では追加料金払うって』

にこやかに会話している束と慎吾。ちなみに、ハヤテと慎吾は束の『身内』判定に合格し、千冬たちまでとは行かないが、それなりに友好的に接している。

「慎吾！ てめえ、俺を売ったのか！」

『いえ。前から気になっていたのでこの際と思ひまして。というか、潜入していた施設を爆破されてもギャグマンガみたいに全身まっくろになるだけで怪我しないなんて…最早人のカテゴリーにあるとは思えません。もしかして、あなた漫画の世界から逃げ出してきたのでは？』

「んなわけあるかー！」

ハヤテは否定するが、小さい頃から共に生活しており、現在も二人でコンビを組んで諜報部員として活動している慎吾からすれば、2

トトラックに撥ねられようが、地上数十メートルの高層ビルから落ちようが、果ては地雷原を全速力で駆け抜ける親友を人間とは認め難いのだ。

「てめえだって、条件次第で10km先の蚊を撃ち落せるバケモンだろうが！　つか、肌で風の流れることができるってこの格闘漫画じゃ！」

ハヤテに言わせてもらうならば、五感が人よりも発達している慎吾に言われたくはないらしい。

『チッ。佐野博士。ちゃっちゃとやってください』

「デメエー！」

面倒になったのか舌打ちをする慎吾。佐野はそのやりとりを気にすることもなく準備を始めた。

「さて……始めるか。なに、心配するな。殺しはしない」

「信じられませんよ!?!」

佐野の無表情がこの状況ではよけいに怖い。

「……痛かったら三回回って「ワン！」って言ってくださいねー」

「無表情、棒読みで言われても——アッー！」

千冬は光太郎と一緒に遠い目で現実逃避をしていた。慎吾と束はモニターで佐野から送られてきたデータを確認していた。

「ふむ…骨の密度が高いだけですか」

「遺伝子に、とか？」

ブツブツと「やはり、改造人間」「いや、もしかしたらアンデッドとかグロンギとかかもよ？」などと不穏な言葉など聞こえない。千冬は脳内で学校に行っている一夏の事を思い浮かべた。そこで、ふと気づく。確か、光太郎も同じ学校に行っていたはず。

「……師匠が休めって」

「あの馬鹿」

光太郎は一応、法律などの関係で高槻姓を名乗っているが事実上は佐野の息子である。だが、光太郎は佐野の事を「師匠」と読んでいるし、佐野も息子としてよりも弟子としてみているため、不自然ではないのだが。

「いや、別に高校レベルまでなら独学でできますし」

「学校は勉強だけを学ぶ場所じゃない。友人と一緒に遊んだりすることも勉強だぞ？ それに大勢の人間と一緒にいることで常識も学べる」

その失敗作がガラスの向こうで泡を吹いている青年の体を弄じ繰り回しているが。佐野をジト目で見ていた千冬の視線を追って納得した光太郎。

「明日から学校行きます」

「ああ。行っておけ」

とりあえず、光太郎は一つ学んだ。

「師匠は技術者としては尊敬できるけど、人間としてはちょっと」

ということを。

「シクシク……汚されたよお」

「男がしな作っても気持ち悪いだけですよ？」

「うるせェよ！ 自覚してるわ！」

結局のところなんでハヤテの自己再生能力が高かったりする秘密は
解明されなかった。だが、佐野はある推測を立ててみた。

「つまり、潜在遺伝子というか休眠遺伝子に何らかの特徴があると
考えられる」

「なるほど」。並外れた身体能力もそれのおかげ？」

「だろうな」

こればかりは佐野も束も専門ではないので分からない。だが、納得出来る推測ではあるため、真相が解明されるまではこの推測でいこうと決めた。

ちなみに、その身体能力の高さに目をつけて後々、完成した強化外骨格を装着されることになる。慎吾も笑っていたが、ハヤテが無理やり引きずり込んだため、佐野からめでたく『人外その2』の称号を受け取ることになった。

第3話 体を調べるだけの簡単なお仕事です。(後書き)

次回は、ISが登場するかも。それと、このままだと「佐野×束」で束さんがヤンデレになりそうな気がするのだが……おk？

第4話 二人の狂人

世界は変わり始める。たった一人の女性により。

「ねえ……りょーへー。見て……」

ISを創りだした束は千冬よりも先に佐野を呼び出した。佐野はひとりでISを見た。そして『興味を抱いた』。

「これで……『強化外骨格』も完成できる。これで、りょーへーの生み出した設計図の大半が実現化できるよ？」

「……そのために創り出したのか？」

「まあ、個人的な事情も無いわけじゃないよ。でも、私が最初に作ろうと思ったのはりょーへーのため。その途中で、いろいろな心ひかれる結果はいろいろでたよ。だけど、きっかけはりょーへーなんだよ」

くすくすと笑う束。そして、束は佐野にISのデータが入ったディスクを渡した。佐野は束とISの1号機である『白騎士』を見て口角を吊り上げた。

「クククッ……クックッ。なるほど。興味深い……実に興味深いぞ東エ！」

佐野は天井を仰ぎながら高笑いを始めた。ひとしきり笑うと、佐野はふらりと研究室を出て行った。東には分かった。『IS』に興味を持った佐野の行動は予測できる。データをひと通り確認した後に、『強化外骨格』の作成に役立つデータを抽出するだろう。

「ねえ……りょーへー。りょーへーには分かる？ 私の言う事を全部受け入れてくれたのはりょーへーだけなんだよ？ ちーちゃんでもない。りょーへーだけ」

佐野にしてみれば『興味があつたから』という簡単なものに過ぎないのだろう。だが、東にとっては重要なものだった。自分の考え出した技術を受け入れて『非現実的』と切り捨てること無くどうすれば実現できるかを考えてくれたのも佐野のみ。

「だから……今度は私がりょーへーの考えていることを実現させる手伝いをするんだよ？」

東の顔は恋する少女のように輝いていた。

束が佐野に近づいたのは、自分と同じ匂いを感じ取ったから。同年代の子供よりも格段に上を行く頭脳を持つ束はそれを最初必死に隠していた。千冬は薄々感づいていたようだけど、言わなかった。気持ち悪がられたくはなかったから。だが、佐野はそんな事などしていなかった。常に自然体で『興味が有るか無いか』で全ての思考ルーチンが完結しているその姿に憧れたし嫉妬した。

「君は怖くないの？ 他人に否定されることが」

一度、こう聞いたことがある。しかし佐野はその発言に対して興味を持たなかったらしく淡々と告げた。

「一々、他人の顔色を伺っていれば作れるもんも作れん。興味の無い有象無象如きに構ってられるか」

その瞬間、束の視界がひらけたような気がした。実際、佐野は他人の評価などどうでもいいのだろう。自分が興味のあるモノに対してのみ情熱などをかける。それは、突き詰めれば研究者・技術者としては当然。ただ、それをそのまま実行出来る人間がどれだけいるだろうか。

「今の私がいるのもあの時りよーへーが教えてくれたからなんだよ。だから、りよーへーの為に世界を変えてあげる。りよーへーが興味をもつような世界に」

それは、恋でもなければ愛でもない。狂愛と言ったところか？

「ちーちゃんが、りよーへーに少し惹かれているのも知っているよ？」

世話焼きな性格の千冬が、生活能力皆無のいわゆる「ダメ男」な佐野に母性本能を刺激されて惹かれているのも知っている。

「でもさ……りよーへーは今の私を作った人なんだ……渡さない。例え、ちーちゃんでもりよーへーは渡さない」

それは、生まれたばかりの小鳥が初めて見た親鳥に見せる「刷り込み」にも似ていた。

「とりあえず、今はISの力を世界に知らしめる時。でかいパフォ
ーマンスが必要だね。あとは……強化外骨格を扱える人間だけど…
：りよーへーが興味を持った人間だけだよね多分。ということとは、
りよーへーが興味を持つように世論を操作すればいい。つまり――
」

束は一人、黙々とキーボードを叩いていた。そして、この数日後に
束が千冬を引き込んで後に『白騎士事件』と呼ばれるISの兵器と
しての有用性を世界に知らしめる事件が起こった。

「クッククク……ハッハッハッハッハッハッハ！」

佐野は笑いながら黒一色の鎧を身に纏っている。『試作型強化外骨
格』は束から齎されたISのデータから必要な部分を抽出してよう

やく完成した。

「師匠：それが強化外骨格の試作型ですか？」

笑い声を聞きつけてきたのかスパナで肩をたたきながら光太郎が現れた。昨日ラボに帰ってきた佐野は一心不乱に強化外骨格を完成させるために作業をしていた。そして数分前に急に高笑いが聞こえてきたので完成したことを悟ったのだ。

「ああ。試作型強化外骨格『零式』だ。とりあえず、詰め込めるだけ詰め込んだ。それと、光太郎。高原と斑目を呼べ」

「あゝあの二人の強化外骨格も作るんですか？」

「おまえのも作ろうか？」

「……ああゝじゃあ、なんかサポート用の奴でいいです」

佐野が珍しく自分の好きなものを作ってくれるということなので、ここぞとばかりにお願いしてみる。そして、ふと佐野の目線がある本のタイトルに向かっていた。

『仮面ライターの秘密〜V〇&ラ〇ダーマン編〜』

「……オペレーションアームか」

どうやらヒントを得たようである。そして、数時間後に光太郎の呼び出しを受けてハヤテと慎吾が現れた。

「お前らに強化外骨格を作ってやる。希望があるならば言え」

「「……」」

到着するや否や凄く晴々とした顔でそんなことをいうものだから、疑ってしまうスパイ二人。しかし、基本的に二人とも貰えるものは貰う主義なので遠慮なく注文をつける。

「とりあえず、近接戦闘特化で。武器はできれば徒手で」

ハヤテは近接戦闘特化。付け加えると、徒手空拳による格闘戦を好む。そのため、強化外骨格の可動域を広く・装甲剛性を高く・できることならばシャイニ〇グフィンガーやサドン・〇ンパクト的な多種多様な格闘攻撃ができるような腕や脚を作ってくれ。とのこと。

「私は遠距離…というか、射撃戦特化で。それと、狙撃演算の補助システムをつけていただけるとありがたいです」

「了解だ。だが、強化外骨格は今のところワンオフの物。完成まではここにとどまってもらうぞ」

「了解」

光太郎はこれから二人がどうなるかある程度分かっているため、心の中で合掌しつつ研究所を出て行った。すでに、ISの『売り込み』を束がし始めているため、混乱しているであろう一夏や箒のフォロ―をするために。あとは、マッド二人にこれから付き合わされるであろう千冬を労うために。

「……苦労人だなあ、俺も」

すぐそばにマッドがいるため精神年齢は幼馴染二人よりも育っているかと自認している光太郎。まあ、そのおかげで一夏や箒の仲をそれなりに取り持てていたと思う。

「つか、小学生がこんな思考っておかしくないか？　まあ、育ての親が育ての親だし」

ただ、一夏を振り向かせたいと頑張っている筈を見ると微笑ましい感じがするため若干もう無理だと思っている光太郎だった。

「とりあえず、強化外骨格に適應するための手術を行う」

「「はあ!？」」

「心配するな。指紋認証のようなものだ」

「なるほど」

「まあ、もしかしたら何らかの不具合が起こらないとも限らんが…おそろくきつと多分大丈夫だろうと推測できる」

「……不安要素しかありませんねえ」

光太郎が去った後の研究所ではこんな会話が行われていた。

追記するならば、手術は無事成功した。ただ、佐野がハヤテの身体をモルモットを見るような眼で見っていたため、何かされたかもしれない。

第4話 二人の狂人（後書き）

うちのとこの束さんはこんな感じです。ISを作ったのは、佐野の興味を自分と世界に惹きつけるため。ある意味純真、ある意味ヤンデレ。

ちなみに、慎吾と光太郎にヒロイン作ります？　ちなみに、現在のカップリング的なものは以下の通り

佐野×束 or 千冬Ⅱ 「人格破綻者コンビ or 生活能力皆無男とだめんずうおーかー」

ハヤテ×楯無 「暴走気味のペットとご主人様」

こんな感じ……ふむ。

第5話 強化外骨格と光太郎の思い

「世界は変わったな……だが、まだ俺が興味を持つほどではない」

佐野は煙草の煙を吐き出しながらテレビを見る。そこには、次々と戦闘機を落としていく幼馴染の姿があった。ちなみに、足元にはハヤテと光太郎が倒れていた。

「な、なんで俺らが同時に攻撃しかけても勝てないんだ？」

「この人も大概ですよ」

どうやら、強化外骨格装着時の戦闘訓練だったようである。しかも、ハヤテたちはそれぞれ強化外骨格を装着しているのに、佐野は生身である。

「貴様らとはくぐってきた修羅場の数が違う。というか、それは俺が作った物だ。弱点・特性などすべて頭に入っている」

なんか納得できない二人だった。しかし、それぞれ専用の強化外骨格も完成し先ほどの全力戦闘でようやくハヤテたちへの受け渡しも

済んだ。

「とりあえず、俺から言えることは…コアユニットさえ破壊しなければいい。それと、強化外骨格の転送装置だ」

「……コアユニットはまあいいさ。それで、転送装置って……これ？」

コアユニット。簡単にいえば、強化外骨格の動力炉や装着者の生命維持機能などが付いている強化外骨格の心臓部。そして、転送装置は強化外骨格を装着する際に必要な装置なのだが――。

「……どう見てもビーコマン〇ーな訳だが……あ、中に強化外骨格のフィギュア的なものが」

「どうやらそれぞれ専用強化外骨格のモチーフが入っているようです…というか懐かしいですね」

昔懐かしいメタルヒーローの変身デバイスだった。二人が佐野に視線を向けると、佐野はエクシー〇ラフトのビデオを見ていた。

「……好きなんすか？」

「メタルヒーローだけではなく特撮全般だな」

ちなみに、ハヤテたちはまだ気づいていないが、ハヤテの強化外骨格の武装転送システムはディケ○ドライバー風、慎吾の武装転送システムはマグナバ○ザー風でどちらも右腰または左腰にある『カードスリット』から用途に応じて『インプットカード』をそれぞれセットすることで武装換装を行う仕様である。ビーファイ○ーである。

「戦隊物は仕様上難しかった。高原の装着時の外見をバトルフィーパー○ボにしようとは度思ったか。いや、今からでも転送デバイスをド○ンチェンジャーに変えるか？」

「「……」」

これが、篠ノ之束という天才にISという兵器を作らせるきっかけを齎した男かと思うとなんだか悲しくなった。ただ、この男の思考回路はよくわからないので考えるのもやめておいた。

「言っておくが、強化外骨格という兵器的には合理的だ。元々、強化外骨格は紛争地域での戦闘を視野に入れて作った」

「いや、でもそれならISのイメージインターフェースのほうが手間がかからなくてよかったんじゃない？」

強化外骨格がISの技術をいくつか取り入れているのは知っている。だが、ハヤテからすればイメージインターフェースは便利だと思うのだが。佐野から言わせてもらおうなら違うらしい。

「お前ら、ドンパチやってる極限状態で武装を完全にイメージできるのか？」

「「あゝ」」

ISは元々宇宙開発やらなんやらが主目的らしいが、強化外骨格は完全に戦闘を主目的として作成されている。そりゃ、命のやり取りをしている最中に武装の詳細なイメージをしろと言われても無理だろう。アニメなどとは違うのだから。

「特撮ヒーロー風なのはただ単にお遊びだが、俺は無駄なことではない」

「まあ、確かにイメージよりもこっちのほうが楽ですね」

頭部装甲^{ヘルメット}を外した状態でデバイスにカードを差し込み武装を呼び出す慎吾。しかも、実用的なものからネタ的な物まで多種多様だった。しかも、慎吾の場合はデバイスのトリガー部をそれぞれの武装に装

着することで使用可能。

「よく作りましたねえ」

「本当だな。俺も、サドン・インパクトを作ってくれて言ったけど、実現するとは」

巨大な両腕でシャドーをしながら感嘆の声を上げるハヤテ。しかも、強化外骨格専用のシステム『グラビコンシステム』のおかげで重さをあまり感じない。それでいて威力も高いので言う事なし。

「人間が想像した物は実現可能だ。ただ、技術レベルなどの問題で『今』作れないだけだ」

紫煙を吐き出しながら平然と言ったのけるその姿勢はさすが技術屋と二人に思わせるだけの威厳があった。

「（ただ、それが興味を引いたもの以外なら大金を積まれたってやらないんだよねあ）」

「（まあ、ある意味では技術者としては正しい姿では？）」

とりあえず、強化外骨格の受領が完了したため、二人は現在所属している『更識』へと帰還することにした。

「さて……東に連絡を入れるか」

東の計画も興味があるので、協力しようと思いついた佐野。ただし、能動的に動くことはないらしい。

この数年後に『世界最強のIS操縦者』の女性の専属整備士に一人の鬼才がついたという。

「箒、行くのか？」

「……ああ。下手をすれば、私たちの身が危険になるらしい」

「一夏に言わなくていいのか？」

箒は悲しそうな顔で首を振る。光太郎が箒から呼び出しを受けた時、とうとう来たかと思った。そもそも、自分とて似たような場所にいるのだ。気持ち分かる。

「でもなあ……アイツも立場が段々やばくなるぞ？」

「え？」

「『篠ノ之束と近しい人間』だからな。ウチの師匠と千冬さん、そしてその家族である俺ら三人は確実にマークされる」

まあ、マークされても実力行使されないように佐野がハヤテや慎吾に護衛を依頼しているが。ちなみに、佐野がと書いたが実際は光太郎が佐野名義でやっている。普通、このようなマネはできないが、佐野にだけは通用する。もし、束の元にいたら恐らく難しかったこと。佐野の性格を巧妙に利用しているのだ。まあ、佐野も光太郎だから許しているのかもしれないが。

「だから、下手すれば連絡が取れなくなるかもしれない。だったら、せめて話をしていけ」

「で、でも……」

中々煮え切らない箒を見て内心で苦笑する。嫉妬深くせに能動的に動かない箒。

「（あゝ報われねえ）」

光太郎は箒が初恋だ。一目惚れと言ってもいいかも知れない。凜とした中にある可愛らしいところに惚れた。まあ、速攻で一夏に惚れているのに気づいたため数分で失恋したが。とにかく、その後は誰にも知られずに振られたとはいえ、惚れた女に幸せになってほしいという小学生らしからぬ思考に行き付き、一夏との仲を取り持ってきたが自分に向けられる好意——LOVEのほう——に気づかないあの男の前では結構苦労した。いっそ箒の好意をこちらに向けようかと何度思ったことか。とにかく、今自分にできることは一夏と会話をさせること。

「行って来い。別に告白しろなんて言っていない。また会おうとかでもいい。手紙とかビデオレターくらいなら俺や師匠が何とかしてやるから」

まあ、十中八九光太郎が仲介するのだろうが。もしかしたら、ハヤテや慎吾辺りに頼んだら快く引き受けてくれるかも知れない。破天

荒な二人だが、自分を弟のように見てくれているため頼み込めば何とか行けるはずと考える。

「ほら、何でもいから話してこいよ。行かなきゃ、俺がお前に告白するぞ？ 速攻でキスしちゃうぞ」

「ば、馬鹿者！ からかうな！ 行けばいいんだろ！」

からかうように言う顔を見赤にして織斑家へと駆けていった。

「……本気なんだけどなあ」

そして、小さくなっていく背中を見ながらポツリと呟くと頭を誰かにでられた。ふと振り向くと、ハヤテと慎吾がいた。

「よっ。いい男ぶりってのを見させてもらったぜ」

「すみませんね。覗くつもりじゃなかったんですけど」

「いや、いいですよ。つか、俺まだ小学生なんですけどね」

慎吾から手渡されたお茶の缶を開けながら大きく息を吐く。そうなるように振舞ったとはいえ、やはり冗談と受け取られたのは傷つく。

「なくんか、俺って小学生っぽくないですよね」

「まあ……一番近くにいる大人が佐野博士だろ？ 仕方ないんじゃない？ つーか、それ言う俺らもまだ高校生の年代よ？」

「ハヤテは『更識』の次期当主の少女の婚約者候補ですからねえ。歳の差は3、4才くらいでしたか？」

そこら辺の事情は細々としているため光太郎はよく知らないが、聞いた話では慎吾もその候補らしいが本人は興味なしとか。

「ま、それはどうでもいいさ。どうだ？ これからガ〇トでも行くか？ 好きなもん奢ってやるよ」

「んじゃ、ゴチになります」

精精、高い物を食ってやると宣言する光太郎に顔色を悪くするハヤテ。慎吾は慎吾でクスクスと笑っているため傍から見れば仲の良い三兄弟にもみえた。

「……ふん。杞憂だったか」

三人が去ったあとに物陰から現れたのは佐野。

「あの馬鹿弟子が潰れるかと思ったが……中々どうして」

どうやら、光太郎が箒に惚れていることに気づいていたようである。
そして、光太郎が潰れるかどうかの確認に来ていたのだろう。

「……ま、そうでなくてはな。奴の強化外骨格を調整するか」

ただ、光太郎用の強化外骨格は完成しているはずなのに調整するのは何故だろう。

第5話 強化外骨格と光太郎の思い（後書き）

強化外骨格は、仮面ライダーディケイドやビーファイターカブトのインプットガンのようにカード／カートリッジ式です。よくよく考えると、兵器として運用するならこっちのほうがいいでしょう。戦闘中にイメージを固めるなんて作者はできません。なので、こんな感じに。

変身デバイスがビーコマンダーなのは、作者が初めて見たヒーロー物だからです。だから、愛着があるのです。

光太郎は箒に惚れていたというぶっちゃければどうでもいい小話を挟みました。さて、光太郎のヒロインは誰なのか……

次回は、三本だてですね。まあ、クオリティは低いですけど。その後は、一話挟んで原作に入るかな？

第6話 親子げんかと鈍感男と相変わらずの男（前書き）

今回は

1. 彼が婚約者候補になったわけ
2. 一夏の鈍感に理由をつけてみた
3. 千冬のドイツ教導に佐野が付いていく。

の三本です

第6話 親子げんかと鈍感男と相変わらずの男

「「喜べ、息子よ！ 嫁さん候補見つけてきたぞ！」」

「「……は？」」

ハヤテと慎吾が丁度中学生の時、事件が起こった。二人とも実家というか、父親のせいで小学校を卒業と同時に裏稼業に就職することになった。まあ、それでいて大学卒業程度の勉強を独自にさせられたため知識面は問題ない。

「実は、『更識』の次期当主のお嬢ちゃんげんまの婿候補にお前ら二人を推薦しておいた。まあ、候補は他にもいるが頑張れ！」

ハヤテの父親まさかぜ巻風と慎吾の父親げんま玄馬はコンビの万事屋として名が知られている。元々は、どこかの諜報機関に所属していたらしいが訳あってフリーになったらしい。だが、機関に所属していた頃から両方の意味で有名だった二人に依頼が来ないということはなかった。むしろ、フリーになったことで頼みやすくなったらしい。

「子供をつくるのは義務だが、ちゃんと16歳まで待つんだぞ？」

「そうそう。それまでは、溢れ出るリビドーは抑えこむかどこかで発散させなさい」

まあ、なぜそんな話になったかは知らない。『更識』といえば、日本でも有数の組織。そのため、巻風か玄馬の血を濃く引いておりまだまだ未熟とはいえ、素手で鉄の扉を破壊するハヤテ、条件付きとはいえ有効射程およそ十キロの慎吾。この二人のどちらかを欲するのも仕方のない事だろう。それはいい。ハヤテたちも恋愛結婚とかなできるはずもないと思っっているから。ただ――。

「慎吾……このバカ親父たちぶっ飛ばしてもいいよな？」

「むしろ、撃ちましょう」

ただ、この二人の親父がすっげー得意げになっているのがむかつくのだ。ドヤ顔で笑っているのがむかつくのだ。

「死にさらせや！」

「トリガアアアアアハッピーイイイイ！」

突貫するハヤテと珍しくトリガーハッピー状態になっている慎吾。だが、父親たちは一瞬呆けた後獰猛な笑を浮かべた。

「む？ 親心が分からん息子たちだな！」

「まあ、思春期真っ盛り。反抗期という奴だろう」

この日、東京のある一画で壮絶な親子げんかが起こったという。ちなみに、被害はその一画が壊滅状態というもので、一時はテロか何かと思われたそうだ。

そして、ハヤテと慎吾は父親には勝てなかった。追記するならば、巻風は素手で重機を破壊でき、玄馬は超長距離精密狙撃や跳弾を自在に操る正しく『人外』な男たちである。

「ちくしょう……ちくしょー」

「いつか……いつか必ず……」

要するに、まだまだ父親超えはできないということである。

中学校の教室で二人の少年が顔を付き合わせている。

「なあ、光太郎。一夏のやつどうにかした方がいいと思うんだ」

「つつても弾よお……」「好きです！ 付き合ってください！」って
言われて「いいよ。どこまで？ コンビニ？」という男をどうにか
出来ると？」

二人は顔を見合わせると大きく息を吐く。

「（まあ、あの誘拐のせいって言うのもあるんだろうけどな）」

中学に入る前にISの世界大会『モンド・グロッソ』の裏側で起こった『織斑一夏誘拐事件』。幸いにも、ハヤテが誘拐される現場を

見ていたため廃工場に連れて行かれた直後に慎吾と共に強化外骨格を着込んで強襲を仕掛けて、一夏を奪還した。一夏には怪我はなかったが、誘拐犯が最初友好的に接してきたせいなのか、見知らぬ人間から向けられる好意を無意識に拒絶する様になってしまった。

「（まあ……仕方ないのか）」

告白されても『知らない』ため無意識に拒絶する。多分、誘拐事件で学んだのだろう。まあ、友達から〜というのが無理ではないためまだいい。

「（あん時は千冬さんが荒れていたなあ。師匠がおとなしくさせたらしいけど）」

まあ、混乱で連絡がうまく繋がらなく、ドイツ軍から一夏の所在地が知らされたので飛び出そうとした時に佐野の元に慎吾から一夏確保の連絡が来たのが同時だったため、千冬は大会を棄権。佐野は飛び出した千冬を捕縛するため強化外骨格を装着し鎮圧したとか何とか。ドイツ軍への借りもあったため、千冬が佐野を連れてドイツに行ったとか。いろいろあったが、その間光太郎と一夏はハヤテや慎吾と一緒に暮らしていたためそこまで不自由はしていなかった。

「光太郎く弾く。そろそろ帰ろうぜく」

「おう。帰りにゲーセン寄っていくか？」

「いいけど、ハヤテさんたちは？」

やってきた一夏に弾がゲーセンに誘うが、一夏は同居人でもある二人の青年の事を聞いてみる。光太郎は携帯を取り出すとハヤテに連絡を入れてみた。

『現在、電源が――』

「どうやら、仕事中だ。多分、今日は二人とも帰ってこないな」

電源が切られている時は任務中と聞かされていたので、今日は帰ってこないと判断した光太郎。

「なら、行こうぜ！」

「そうだな〜久しぶりに遊ぶか！」

「……一夏。頼むから、帰りのバス代は残せよ？」

なかなか青春をしている男たちだった。ちなみに、中国に戻った少女や未だ日本を点々としていであろう筈には一夏の写真やビデオを送っていたりする。自分も出会いが欲しいと思う光太郎だった。

「……光太郎。お前何してんの？」

「脱衣麻雀」

「え！？ あんの！？」

ゲーセンで光太郎が脱衣麻雀をやっている姿に、一夏たちは恥ずかしがるよりもそんな懐かしいものがこのゲーセンにあることに驚いた。

千冬がISの教導をするためにドイツに向かう時に佐野も同行した。佐野から見れば千冬は充分興味を惹かれる存在でもあるから。それに、ドイツの科学力というのも見ておきたかったからだ。

「最初に言っておく。肉塊に興味はない」

着任早々そんな事を言ったものだから、集まっていたIS操縦者の女性たちを怒らせたが、そもそもが独自に強化外骨格を作り出し、試作型の調整などを自分でやっていた佐野だ。格闘訓練で佐野をつぶすと息巻いていた軍人たちをたった数分で鎮圧した。

「……嘘……」

「所詮は、ガキか」

強化外骨格はその開発コンセプトから、それこそ並の軍人でも扱うことが難しい兵器。試作型などそれこそ安全装置など付けられていない。しかも、佐野が扱う強化外骨格『零式改』は試作型をそのまま改良しているため様々な実験兵装などが積まれているし、出力や剛性などもハヤテたちの強化外骨格よりも格段に上なのだ。

「貴様らは軍人だろう？　ならば、固定観念は捨てろ。女しかISが使えないから女が強いとかふざけた幻想は抱かないことだ。男でもISを纏う女を倒せる奴はいる。そんな事はあるかい？　ならば、こう言ってやろう。ありえないことこそありえない、と」

「（……遼平。お前、さっさとドイツの技術力を見たいがために炊きつけるなよ）」

佐野の性格を知っている千冬はため息を吐いた。噂では、現在佐野がたたきつぶしたドイツのエリート部隊『黒ウサギ隊』の隊長であるラウラ・ボーデヴィツヒは試験管ベイビーらしい。千冬は踏み込むことはしないが、佐野は間違いなく踏み込む。

「（ボーデヴィッヒ。予め言っておく。すまん）」

それは珍しく千冬が全くの他人を氣遣った言葉だった。

「出来そこない？　これのどこが……クッククク……アーハッハッハッハッハ！」

「……教官。佐野博士は？」

「気にするな。いつものことだ」

黒ウサギ隊や千冬の見ている前で先程行われた千冬と黒ウサギ隊の模擬戦結果や様々なデータを見ながら高笑いをしている佐野。その横には、耳栓をつけて普通に資料整理をしている光太郎がいた。どうやら、佐野に呼び出されたらしい。

「師匠くさっさとデータ渡してください」

「ん？　ほれ」

淡々と告げる光太郎。実は、光太郎。ぐっすりと眠っていたときに佐野から呼び出しを受けて、ハヤテに連れられるままドイツにやってきたのだ。一夏の護衛は現在慎吾が行っており、ハヤテはまた用事があるとかですぐにドイツを離れた。要するに、光太郎は機嫌が悪いのだ。

「チッ。師匠。『越界の瞳』だかなんだか知りませんが、これって完全に有用的でしょ」

「それが分からん馬鹿ということだ。ラウラ・ボーデヴィツヒは充分過ぎるほどに有用だ」

「（あいつら……ここがどこか分かっているのか？）」

最近、佐野とそれに似てきた光太郎の発言を聞きながら千冬は小さく息を吐いた。二人が言っていることは、完全にドイツに喧嘩を売っているものでもある。ただ、ラウラは佐野に心酔しているようである。というのも、ラウラの軍での扱いは悪かった。黒ウサギ隊はそんな事はなかったが、ラウラを出来そこない扱いする軍人はたくさんいた。しかし、軍の高官から話を聞いた佐野がラウラを『有用』としてラウラの持つ能力に『興味を持った』ため目をかけるのも当然といえる。

「（……私の影が薄いな）」

無論、そんな事はないのだがどうも佐野の隣にいと自分が霞むような気がする。いや、一夏が誘拐された理由とかを考えるとそれでいいのだが、やっぱり自分も人間なので目立ちたいという気持ちはある。

「光太郎。後は任せた。俺は技術部に顔を出してくる」

「……別にいいですけど……あんま前みたいに派手なことしないでくださいよ?」

「待て。遼平。お前、以前何をした?」

「ハッキング」

千冬は改めて思った。この男と付き合うと疲れる。ちなみに、光太郎はラウラに親近感を持ったらしい。今では兄妹のように仲が良いという。

「ま、俺は親から捨てられているから親の愛情なんて知らないからなあ。ラウラも親はいないからな。そこら辺で共感したんですよ」

千冬に光太郎はそう語った。

第6話 親子げんかと鈍感男と相変わらずの男（後書き）

まあ、婚約者候補になったわけは別にどうでもいいとして（おい一夏のあの精神疾患並の鈍感に作者なりに理由をつけてみました。友好的に接してきた人間に誘拐されたから、気づかないうちにトラウマを抱えてしまったという感じ）。

ラウラには佐野は興味を持ちます（技術的な意味で）思えば、ラウラってその出生とかの関係で佐野みたいな奴が居れば心酔しそうな気がしますね。原作での千冬がいい例。一応、ここではラウラの中で千冬と佐野は同等です。ただ、若干佐野が高いかな？

ということで、次回からそろそろ原作の香りが漂ってきます。

ちなみに、慎吾と光太郎のヒロインだけどこんなのを思いついた。

慎吾×簪「最近、銃を持つヒーローっておいよね」

光太郎×本音「周りが周рина光太郎には本音は癒しなのです」

こんな感じか……

第7話 強化外骨格対IS

たくさんの観客の視線の先にいるのは一組の男女。片方は、ISを装備している『世界最強のIS操縦者』『ヴァルキリー』の異名を持つ織斑千冬。

「まさかお前と戦うことになるとは」

「……まあ、よくよく考えると改良してから戦っていなかったからな。調整には丁度いい」

タバコを咥えながら顎と後頭部に手を当てて首の骨を鳴らしているのは佐野。場所はIS学園のアリーナ。ここに教員として働くことになった千冬と、客員教授として籍を置くことになった佐野。二人とも程度・方向に差はあるとはいえ世界的に有名な人間。そんな二人が戦うという事になったのだ。中継されても仕方ないと思われる。

「強化外骨格のデモンストレーションか？」

「ふむ……それもあつたか」

多分、佐野は本気で『零式…改』の稼働実験位にしか思っていないか

ったのだろう。相変わらずの思考回路にため息を吐きたくなるが気にしない。

「行くぞ」

佐野が作った重斬刀「散華」を正眼に構え、佐野に突撃する。周りや審判役の山田真耶は絶句するが、観戦している光太郎やビールやおつまみを売っているハヤテと慎吾は遠い目をした。千冬も分かっている。目の前の男は『常識外』であることを。

「……」

右足を押し出すように蹴りを放ついわゆる「ヤクザキック」で千冬の一閃を止めた佐野。会場が静寂に包まれるが千冬はそのまま連撃を加える。

「相変わらず化け物だな！」

「強化外骨格の瞬間装着の実験だが……問題ないな」

さすがに生身では無理だったのか。それとも、言葉通りの実験だったのか千冬には検討がつかない。だが、分かることはある。

「その『自分の体にも興味がない』のも相変わらずか」

「まあ、精神的に異常だというのは理解しているが……俺らのような人間は少なからずこうだぞ？」

この男の『興味のないことには無頓着』という思考は自分自身にも適応される。しかも、それを自分自身で受け入れて自覚しているのだから始末に終えない。

「さて…そろそろ行くとするか。着装」

常に着ている白衣の懷からデバイスを取り出し、キーワードを口にする。それと同時に佐野の体を黒一色の鎧が包む。

「あれが…強化外骨格」

各国政府の要人の誰かが呟いた言葉。佐野が作り上げた強化外骨格。ISが頂点に立っていると思われがちな軍事兵器。しかし、大半の軍人は分かっていた。ISは欠陥品だということを。女性にしか扱えない。しかも、数に限りがあるということ。まだ、女性にしか扱えないというのは納得しよう。だが、数が決まっているのは幾ら何でもありえない。元々が宇宙開発用だとしてもだ。

「それに比べると強化外骨格……使用者への反動が凄まじいとはいえ兵器としては合格か」

強化外骨格のスペックデータは佐野から開示された。現在、開発途中という量産型の強化外骨格『陽炎』は量産を視野に入れられているため幾らかデチューンしているらしいが、それでも各国軍のエリート中のエリートくらいしか扱えそうにない。だが、鍛えれば問題ないという点ではISよりも評価は高い。

「それに、佐野博士自身も凄まじい戦闘センスだ。考えようによっては現場が一番欲しがっている機能を付けてくれるかもしれんな」

各国要人はすぐさま佐野へのご機嫌取りを考えていた。ただ、佐野に取り入るには束以上に苦労することは間違いない。

「せやあ！」

「……フウッ」

千冬の斬撃を全て掌底で弾き返す。零式…改は全てにおいて性能が高い。佐野が常に改良し続けているという理由もあるのだが、なにより零式は元々佐野の身体能力を基準に作られているという理由がある。

「三蓮華」

左胸・水落・側頭部と流れるように掌底と蹴りを放つ。千冬の剣の腕は驚異。だからこそ佐野はその剣よりも内側に入り込み戦う。普通ならば考えられない。しかし、佐野は『恐怖』には興味がないため気にしない。

「ええい！ 戦いづらい！」

千冬は相変わらずの佐野に若干苛立っていた。自惚れていたわけではないし、鍛錬も続けてきた。だが、佐野とこうやって相対すると佐野の異常に気づき恐怖してしまう。

「何時までもお前の下にいるのは御免被る！」

「……ふむ」

千冬にとって佐野は仄かな恋ごころを抱く異性であると同時に超えなければならぬ壁でもある。目の前の男に勝てなければ『世界最強』を拝する事などできない。

「なるほど…全てぶちまけろ。その結果が気になる」

佐野はそう告げると頭部装甲を脱ぎ捨て、自分の頭を両手で掴み首を鳴らし始めた。光太郎は佐野が本気になったのを悟った。

「（……ただ、あれって傍から見れば弱点増やしたようなもんだからなあ）」

光太郎は頭を掻きながら千冬を見た。そこには、刀を震えるほど握り締めている千冬がいた。

「ハンデのつもりか？ 私を舐めるなあ！」

そこから始まったのは凄まじいまでの斬撃の応酬。少しでも手元が狂えば佐野は無事では済まないはずなのに、佐野は笑っている。

「クックック。見せてみる。お前の全力を！」

「（あっちゃ。完全にキマってるよ）」

多分、ここから観客の皆様は信じられないものを見るだろう。そう
なると、どんなことを思うのか？

「少なくとも、ダーウィンに喧嘩を売っているのか？と思うのは確
かだと思いますよ？」

慎吾のつぶやきが何故か胸にストンと落ちた。

「ハアアアア！」

「……螺旋」

千冬の突きを螺旋を描きながら放つ掌底で受け止める。そのままの体勢で睨み合う二人。といっても、千冬が一方的に睨んでいるだけだ。

「ふむ。人の感情も存外馬鹿にできんな」

「お前は、興味を持つのが遅すぎる。人の可能性は馬鹿にできないと昔から本で言われていることだろう？」

二人ともが凄まじい力で拮抗しあっているのが観客たちにも分かる。だが、何も言えない。これが『最強』と呼ばれる者たちの戦闘なのかと息を呑んでいる。そして、ハヤテが懷からコインを放り投げた。コンクリートに当たり甲高い音が響いた。それと同時に自体が動いた。

「とった！」

わずかに刀の切っ先をずらすだけでよかった。ただ、それだけで刀は佐野に向かう。ただ千冬の誤算はそれが佐野の頭部に向かったことだろう。千冬だけでなく観客や光太郎たちまでもが顔を青くするが、すぐに信じられない光景を目のあたりにすることになった。

「――ッ」

「嘘だろ……」

佐野は神速と言ってもいい速度の突きを止めた。迫り来る刀を噛んで止めるというありえない方法で。

「ま、なんとかなるものだ」

若干、聞き取りづらくなったが佐野はニヤリと笑うとそのまま刀を噛み砕いた。

「うそ〜ん」

ハヤテの言葉は静まり返った空間に響き渡った。佐野は口の中の刀の切っ先を吐き出すと右手を弓なりに引き、構えた。

「呆けるなよ？」

「ッ！」

千冬は距離をとると再び刀を呼び出した。そして、そのまま斬りかかる。もはや余計なことなど考えない。ただ、斬るのみ。佐野は、一歩だけ踏み込んだ。

「穿破」

「一閃！」

空気が震えるほどの振動と共に決着がついた。零式…改の装甲を切り裂こうとした刀は佐野の左手で止められ、右の貫手は淡い光を放ちながらシールドバリアーを透過し、千冬の水落に迫る。そして、体に刺さる直前で貫手が止まった。

「……終わりだな」

「まさかシールドを透過するとは、な」

「中和機能を付けたが…駄目だな。あまりにも使えない」

強化外骨格を解除した佐野はタバコを取り出して火をつけようとしたが、千冬に取られて微妙な顔になる。

「ここは禁煙だ」

「チッ。喫煙者には生きづらい世の中だ」

「なら、マナーくらい守れ」

二人は軽口を言い合いながらピットに戻って行く。佐野も久しぶりに体を動かしたので機嫌がよさそうだった。

「あの二人：周りの状況忘れているのか？」

「仕方ないっしょ。師匠は基本的にアレだし。千冬さんも全力で戦ったから気分いいんだろうし」

「……さて、どうやって収集付けましょうか？」

光太郎たち三人は静まり返っている会場をどうするか考えていた。ちなみに、この後ISを圧倒した強化外骨格に注目が集まったのだが、ISの利権を守りたい連中の裏工作でこの戦闘のデータが流れることはなかった。あくまで『データ』である。

第7話 強化外骨格対IS（後書き）

メールで「佐野と千冬さんの戦いを見てみたいです」と言われたので書いてみました。

佐野が勝ったのは、佐野が自分自身の体の怪我とかを気にしないから千冬よりも一歩踏み込めるからです。

次回は、ハヤテたちのお話。その後、ネタ集を上げて原作入りですね。

第8話 亡国機業の影

「慎吾！」

「ええ。そのまま突貫してください！」

「シャイニングフィンガー！ってかぁ！？」

黒と赤のツートンカラーの鎧が赤く発光した右手を敵へと突き出しながら轟音と共に突貫する。そして、後方では深緑と群青色の鎧がライフルを構えて援護射撃を行っている。

「なんだよ！ ISじゃないのに！？」

「ハッ。テメエが最強だと思うんじゃない！ つか、この前の佐野博士と織斑女史の戦闘情報を掴んでいるはずだろうが！」

ハヤテ専用の強化外骨格『鬼火』おにびはハヤテの希望をそのまま具現化した兵器とも言える。付け加えるならば、搭載されているPICとグラビコンシステムを佐野がいじっているため、空中を走ることもできるし空に向かって立つこともできる。他にも光学迷彩など最早

忍者としか言えないような装備がある。

「しかし…やはり、ISよりこちらのほうがいいですね。なんとうか…どこまでも実用的というかなんというか」

慎吾専用の強化外骨格『穿焰』うがちほむらも慎吾の希望を具現化した兵器。銃器を使うという事でやりやすかったのか、佐野の創りだした様々な射撃兵装を運用できる。例えば、ガトリング砲やレールガン。果ては、リフレクタービットやマイクロブラックホール砲などというヤバ気なものまである。

「ふざけんな！ 男なんぞに負けてたまるか！」

そして、現在戦闘を行っているのは最近になって活動を活発化させているISを所有している『亡国機業』ファントム・タスクというテロ組織。ハヤテと慎吾は『更識』のサポートを受けながらこの組織を追っている。というのも、人体クローン生成などの非合法研究を行っているという情報をつかんだり、陽炎のデータを盗んだりいろいろやっているからだ。まあ、非合法研究は佐野もやっていたりするがそれはそれ。さらに言うなら、一夏の誘拐事件の実行犯であるとされていたりアメリカの研究所からISを強奪しているので、国際指名手配されていたりする。まあ、どっかの大国あたりが秘密裏に援助しているかも知れないが、そこは黙認というかあくまで『亡国機業』を壊滅させるのがハヤテたちの任務なので、とにかく組織の情報を集めているのだ。

「白虎咬ォ！」

両手にエネルギーを纏わせた鬼火がISに突貫するが、突如横から奇襲を受けその場を離れる。と言っても、慎吾が追撃をマシンガンで牽制していたがそれだけで充分だったのだろう。敵ISはその一瞬でその場を離れた。

「チッ。逃げられたか」

「仕方ありません。最大巡航速度などではあちらが上です」

強化外骨格はISとは違い、どこまでも『兵器』としての運用を考えられている。そのため、旋回速度などではISと同等だが、最大巡航速度などではISの下に位置する。要するに、ISの一撃離脱戦法に対処することが難しいのだ。まあ、それはともかく。

「それより聞いたか？ 一夏と光太郎のこと」

「ええ。確か、一夏がISを発動させた。それに伴い、IS学園へ光太郎と共に通うことになった：でしたっけ？」

「ああ。一応、楯無から俺らも何らかの形でIS学園に入れるよう

に交渉しているらしい」

一夏がISを起動させたという情報が入った。佐野曰く「束の暗躍だろう」とのこと。ただ、いろいろと一夏の事情を考えるとISを起動させたほうが守りやすい。その理由としてはIS委員会という国際組織がすでに存在しているからだ。佐野は有名ではあるし、コネもいろいろとあるが、所詮は一人の人間だ。というか、佐野に守らせるにはまず一夏に興味を持たさなければならぬ。実に面倒だ。

「千冬さんも無理だろう。つまり、実質的には俺らが護衛をすることになる」

「……精神面は光太郎やその他の友人に任せるとして……肉体面でということですか？」

「ああ。ただし、専守防衛に努めろだ」と

基本的に『見敵必殺』をモットーとするハヤテは、専守防衛は苦手である。それに殺したほうが後腐れがないという持論もある。そのため今回の『上』からの命令は不満のようである。

「仕方ないでしょう？ 一般人、それも思春期の女の子の前で殺すんですか？ さすがにやめておいたほうがいいかと思いますよ？」

そう言われると弱い。そもそも、自分たちは特殊なのだ。普通、こんなふうに考える奴などいやしない。

「とにかく、一度『更識』に戻りましょう。そこら辺の内容も聞いておかなければなりません」

「だな。後始末は、『G9』がやるんだっけ？」

「ええ。それと『黒ウサギ隊』の人が来ていますよ」

「ん？ 確か…ボーデヴィツヒ少佐の部隊だったか？」

ドイツの森林地帯で戦闘を繰り返していたので、情報操作や状況証拠の捏造などのためにドイツ軍の特殊部隊である『G9』と話をしていると、ISを展開した数人の少女たちが自分たちの前に下りてきた。

「ご苦労様です」

一応、ドイツなので流暢なドイツ語で挨拶するハヤテ。慎吾も同様。そもそも、今回はフランスで発見した『亡国機業』のメンバーと戦闘していたら、はからずもドイツに侵入してしまったという経緯が

ある。慎吾から連絡を受けた光太郎がドイツ軍に連絡を入れたらしく、幸いにもお咎めなしとなった。まあ、ハヤテと慎吾の名は有名でもあるので何かあったときに依頼しやすいという思惑もあるのだろうか。

「それより、高原殿……佐野博士と織斑教官はお元気でしょうか？」

ラウラが少し戸惑いながらそう質問した。ラウラたちが派遣されたのはただ単に、ハヤテたちをドイツの空港まで送り届けるという任務。というか、そもそもハヤテたちにはそんなモノは必要ないのだが、そこはいろいろと大人の事情があるのだ。

「ん？ 千冬さんはIS学園で頑張ってるよ。佐野博士は……慎吾、今あの人がどこにいるか分かる？」

「確か光太郎の話では……IS学園で他国のISをいじくり回しているとか何とか」

「……いつもどおりだな」

すでに、光太郎専用の強化外骨格『蚩尤』を完成させており現在千冬用に強化外骨格を作成している佐野は、千冬の誘いを受けてIS学園に特別技術顧問として在籍している。といっても、実際に教壇に立つことは珍しく一日の殆どを研究室で過ごしているとか。

「そうですか……よかった」

「（……光太郎の言葉は本物だったか）」

「（まあ…佐野博士も千冬さんとは別ベクトルでカリスマ持ちですから……）」

光太郎から「ラウラ・ボーデヴィツヒは師匠と千冬さんに心酔している。特に、師匠に対しては崇拜の域」と愚痴られていた。そのため、佐野の一番弟子でもあり、佐野が後継者として育てている光太郎は最初、ラウラから嫉妬丸出しの視線を受けていたりしたらしい。

「さて、いつまでもここで話しているわけにもいかんか。とりあえず、案内してくれますか？」

とにかく、一度日本に戻り今後の行動について聞かなければならないので空港まで案内してもらうことにした。その際に、ラウラたち『黒ウサギ隊』の連絡先を聞いて、今後の協力関係を結ぶことに成功した。

「師匠。一夏がISを使用したのはやはり？」

「ま、束の思惑が絡んでいるのは間違いない。というか、ISでよかったと思うぞ？ 防御力で言うならISの方が上だ」

「まあ……そうでしょうよ」

装甲自体の剛性でいうならば強化外骨格の方が上。しかし、ISには『絶対防御』という切り札がある。強化外骨格は佐野が「『絶対防御』などがあればそれに無意識に甘える。そんな事をしたら勘が鈍るだけ」という言葉で、防御用の装備などはあれど『絶対防御』のように切り札的なものはない。そのため、一夏の事を考えるとISの方がよかったりする。

「それより、お前は一夏のサポートにつけ。束から白式が送られてきた。調整はお前がしておけ」

「はいはい。白式ってどんな感じになっているんですか？」

「ポン刀一振り」

「……は？」

束が寄越したというISにコードをつなぎながら佐野に仕様を聞いてみると意外な事実が返ってきた。

「ポン刀一つって……ピーキーどころの話じゃない気が……」

「そんな事は知らんよ。束からの伝言だ。『零落白夜』のせいできついと思うが、お前なら何とかできるだろうだと」

「……一夏用ですよ？ だったら、ポン刀一つでも大丈夫だと思いますが、牽制用の射撃兵装付けますよ？」

「好きにしろ」

佐野は白式自体にはもう興味はないのだろう。白式に搭載されている『零落白夜』のデータを吸いだしており、強化外骨格用に変換している。

「……」

佐野の性格は分かっているが、幼馴染が作ったものをもう少し見てやってもいいんじゃないかと思う。まあ、束も千冬も佐野の事を知っているので何も思わないだろう。

「（むしろ、束さんなら放置プレイとか言って嬉しいがな）」

束が佐野に異常なまでの執着を持っているのも知っている。最近のサブカルでブームになっている「ヤンデレ」に類するものと光太郎は思っている。というか、ISも元々は佐野の強化外骨格を完成させるための素材として作ったとか言っていた気がする。

「（なんというか……ううむ）」

うまくは言えないが、佐野と束に引っ掻き回された世界に同情したくなる。まあ、だからといって自分も今の生活が楽しいし、ISや強化外骨格をいじるのは自分の仕事なのですぐに同情も消えた。佐野に随分と影響されつつある光太郎であった。

第8話 亡国機業の影（後書き）

とりあえず、現時点での強化外骨格の名前が出ました。一応、佐野と光太郎のモノを除いて強化外骨格には「火」を連想させる名前をつけています。意味は、特に無いですよ？まあ、思想などの「生命と破壊の象徴」などという中二的な考えもないことはないですけど。

第9話 原作の一話前

その1…彼は如何にしてその地位に上り詰めたのか

「そういえば、ハヤテさん。更識の当主の婚約者になったらいいけど…どうやったんですか？」

ある日の午後。珍しく、ハヤテと慎吾、光太郎でお茶を飲みながらそんな会話をしていた。

「え？ 婚約者たちが南国の孤島に放りこまれて一週間ほどのバトルロワイヤルとサバイバルをしてだな」

「あゝつまり、それで勝ち残ったと？」

慎吾も候補だったはずだが、元より慎吾は興味がなかったからハヤテと協力して最終的には辞退するつもりだったのだろう。とそこまで考えてふと思った。この二人が一週間も待つのか？

「確か、開始十分で半数を鎮圧。深夜帯に入れば残りを殲滅したね。実質、一日でバトルロワイヤルは終了。残りの6日は二人で

のんびりサバイバルでしたね」

「……あんたら何してんすか」

こいつらも大概だと光太郎は思った。だが、傍から見れば光太郎も同類である。

その2…ハヤテたちはIS学園で用務員として過ごすことになりました

「……」

「……」

トンカントンカンと金槌で釘を打つ音が聞こえる。用務員に配られるのはツナギか作業服。二人は作業服で活動している。

「しかし……やっぱ思春期の女子だけあって元気だねえ」

「ただ、こちらとしては元気すぎるのも問題でしょう」

現在、二人がいるのは大浴場。理事長曰く、春休みの内に浴場の大規模改装を行うつもりらしい。何気に広いので結構面倒だったりする。先ほど、楯無や虚などが差し入れを持ってきてくれた。その際、クラスメイトと思わしき女子たちもやってきてひと通り話した結果が上の会話である。

「つか、何気に俺らって万能だよな？ 普通、左官の真似事とかできないよな」

「まあ、あらゆる職業ができなければ潜入もできませんし。そこはあの親父たちには感謝でしようか」

それこそ、いろんなコトを覚えさせられた。変装術から声帯模写など。女装術などを教え込まれた際は本気で戦闘になった。まあ、すぐに二人とも負けたけど。

「しかし、女装してナンパされるのはまだしも…楯無たちに泣かれたのはどうなんだ？ あ、タイルとって」

「まあ、仕方ないんじゃないですか？ ある意味、女性として負けているようなものですし。あ、釘とってください」

グダグダ言いつつも仕事はしつかりとする二人だった。

その3…会長の婚約者は人間ですか？

それは、クラスでのひとコマ。思春期の女子らしく「どんな男がいいか」という話になっていた。やはり、女尊男卑の風潮が強いとは言え昔からの「お姫様」に憧れる少女は多いのだ。そして、そんな会話の中で新聞部の黛薫子が楯無にあることを聞いた。

「確か、たっちゃんはお嬢様だったよね？ やっぱ、婚約者とか許嫁といえるの？」

「ええ。いますよ？　とっても強くて優しい人です」

ニコニコと即答した楯無に全員が固まり、一気に騒ぎ始めた。

「え？　強いって……」

「言葉のとおりです。私がISを纏っても勝てるかどうか」

楯無の実力はすでに学校中に知れ渡っている。千冬よりは劣るとは言え『学園最強』と呼ばれているのだ。そんな楯無が勝てないと言われる相手。どんなものかと想像を膨らませると楯無がゆっくりと校庭に指を向けた。全員が、そこに顔を向けると木刀を持った千冬と戦っているハヤテの姿があった。

「いや、だから！　一夏の部屋にエロ本を仕込んだのは俺じゃないです！　つか、慎吾がとか考えないんですか!？」

「やかましい！　厚木がやるはずもないだろうが!」

「一夏の友人の線は!？」

「あいつらにやったら死ぬだろう!」

「理不尽——!？」

千冬の目にも見えない太刀筋を若干オーバー気味に避け続けるハヤテ。時には、関節ってなんだろう?というような避け方をしている。ちなみに、エロ本は御手洗一馬が仕込んだ。

「え? あの……え?」

「ちなみに、ハヤテ君に勝てるのは佐野博士とお義父様の巻風さんと慎吾君のお父様の玄馬さんだけです。ただ、織斑先生は今のように『ブラコンブースト』が掛かっている状態のみだそうです」

楯無はうつとりとハヤテを見ているが、現在のハヤテの避け方は軽く世界中の医者に喧嘩を売っているような避け方である。人間の頭は亀のように体に引っ込めることはできないし、河童の様に片方の腕を引けばもう片方の腕が伸びる訳もない。

「(あれ? たっちゃん男の趣味ってもしかして……え?)」

とにかく楯無がハヤテにベタ惚れなのは分かったのだが、あんな人間と言っているのかよく分からない存在を好きになるとはどんな趣味をしているのかと思ったりした。

その4…こいつらは、別に取り入れることはしない。

それは何時のことだったか。更識簪はふと思う。自分は努力してきた。しかし、自分の上には常に姉がいた。『天才』と称される姉。簪も充分に優秀とされる能力を持つが、姉には敵わない。勿論、姉の事は好きだ。自分と遊んでくれるし、分からないことがあれば何でも教えてくれる。だが、だからこそ嫉妬した。なんでもできる姉に。そして、周りも姉を褒め称える。勿論、そんな人ばかりではない。だが、中にはいるのだ。例えば、『更識』を自分のものにしたいがために近づくものが。

「『更識』の次期当主であるこの子の婚約者を決める。候補者たちよ。自分の能力を売り込んでみろ」

父親の『楯無』から告げられた言葉。そこから、簪に言い寄ってくる男たちがいた。どうやら、自分を垂らしこんで姉に近づこうとしているらしい。そう思うと自分はなんなのだろうと想うようになり、いつしか姉に近づくこともなくなった。

「……王手」

「……じゃ、こっちに」

そして、そんな日が一月くらい続いた時に彼らに出会った。確か、あの日大広間にいた姉の婚約者候補の二人だったはず。資料も読んだ。あの有名な『人間暴風』ヒューマンノイドタイフーン 高原巻風の息子高原ハヤテと『狩人』 厚木玄馬の息子厚木慎吾だったはず。

「（なに…してるの？）」

大半の婚約者候補たちは自分の下心や所属しているであろう機関の思惑などもあり必死に売り込んでいる。しかし、この二人はそんな事をせずに時たまこうやって屋敷に来ては将棋を打ったり、当主からの受けた仕事の報告をするだけで売り込むことはしていない。

「しかし……面倒な事になったな」

「個人的には『更識』という組織よりも自由度が高い佐野博士に付きたいところですね。まあ、潤沢な資金という面はいいかもしれませんが」

二人の会話を隠れて聞いてみると、どうやらこの二人は乗り気ではないらしい。しかも、親に勝手に仕組まれたらしい。

「というより、ハヤテ。貴方は他の候補者よりも一歩リードしているでしょう？ 元々はあの娘の護衛としてここにいたんですから」

「嬢ちゃんが小学校に行っていた頃だけだ。っーか……あっちが覚えてるかどうか」

「いや、ここに来るたびに顔見せるならそれなりに覚えているでしょうよ。ところで、そこのお嬢さんはどちらさま？」

「ひゃっ！」

突然、声を掛けられて声を上げると二人からくつくつと笑い声が聞こえてきた。

「慎吾。驚かせたら駄目だろ。ただでさえ、お前の察知能力は高すぎるんだから」

「これは失礼」

アッハツハと笑いながら尻餅をついた簪に手を差し出す慎吾。その手をとって立ち上がると、二人は簪の顔を見て目を瞬かせた。

「……慎吾。この子って簪ちゃんじゃね？」

「あゝ。確かに、以前屋敷に来たときに見たことありますね」

「あの……」

なんというか、自分を知っているのはある意味当然と思えたが、その理由が姉に取り入るためではないというのは始めてだった。そして、いつしか簪はハヤテたちと一緒に過ごすことが多くなり、何故かいつの間にか姉もやってきていた。

「調子にのる「うるせえ」げふ」

それに腹を立てたのかそれとも、年下に負けそうになっているのが

気に入らないのか突っかかる輩がいたが、速攻でハヤテと慎吾に
められていた。

第9話 原作の一話前（後書き）

次回から、原作に入りますが、一話は短編で投稿していたものと内容がそう変わらないため2話を書いたらそれと同時に投稿します。

感想お待ちしております。特に、フラグ的な意味で。

ここまでの設定

佐野遼平

第一部の主人公。千冬や束の幼馴染。性格は、興味が無いものには何であろうと関心を持たない束以上の性格破綻者。容姿も良く、身体能力も千冬並、頭脳は方向性は違うが束以上というまさに理想の人間ともいえるが、前述の性格のせいで近づく人間はあまりいない。キャライメージは『コードギアス』のロイドや『ソウルイーター』のシュタイン。

強化外骨格『零式…改』

佐野専用の強化外骨格。強化外骨格の試作型。『圧倒的戦闘能力による双方の陣営の継戦能力を削る』という根本的な思想により作成。そのため、カタログスペック上では存在する全てのISと戦っても互角に戦える。強化外骨格1号機というだけあり、性能は規格外。佐野の能力を基準に作成・調整されているため、佐野以外が装着すればもれなく死ねる。

高槻光太郎

第二部（学園編）の主人公。一夏や箒の幼馴染。性格は、面倒見はいいが、佐野の性格に引っ張られている部分があるため、それが言動にでる。身体能力は、ISを装着している女子を抱えるくらいの力はある。また、情報処理能力は高いため数秒でISの設定を変更することも可能。頭にタオルを巻いていることがある。キャラクターは、「パトレイバー」の篠原遊馬。あくまでイメージ。

強化外骨格四号機『蚩尤』

光太郎専用の強化外骨格。主に、ISや強化外骨格などへのアクセス・整備・改造などが可能になっている。戦闘用の武装はないが、ケーブルなどをISや強化外骨格に繋ぐことで強制停止させたりすることができるので戦えないわけではない。

高原ハヤテ

ご存知『人外予備軍』の男。年齢は二十歳。性格は道化的。徒手による格闘戦では千冬を退けるが、基本的にオチ役なのでそれを発揮できるのはシリアスな場面でしかありえない。基本的にネタに走る傾向がある。身体能力では、鉄の扉を素手で破壊できる・爆心地にいても真っ黒に汚れるだけというもはや変態の域にいる。現在、更識楯無と婚約中。関係はご主人様と犬。勿論ハヤテが犬である。キャラクターイメージは、「マクロスプラス」のイサム・ダイソン。

強化外骨格式号機「鬼火」

ハヤテ専用機として製造された強化外骨格。一番の特徴は、PICと重力制御装置『グラビコンシステム』の複合システムにより、足元に力場を作りその上に乗ることができる。それを応用することで、空中で逆さまに立つことが可能。他にも、電磁迷彩が搭載されている。

そして、「インプットカード」をバックルに装填することで多種多様な武装を呼び出すことができる。鬼火用の武装は腕・脚が多種多様な形状になる。

斑目慎吾

ハヤテとコンビを組む男。何気に『人外予備軍』の男。性格は、誰にでも敬語。ただし、腹黒である。基本的に銃火器を使用するので、ハヤテとのコンビネーションは高い。身体能力では、条件次第で10キロ狙撃を行うほどの視力や五感が発達している。また、ガンカタを使える。キャライメージは、ロックオン・ストラトス（兄）。でも、作者の狙撃手のイメージって「敬語・冷静」なんだよな。なんだろ？

強化外骨格参号機「穿焰」

慎吾専用機として製造された強化外骨格。一番の特徴は、単機で関東地域の電力をまかなえるだけの高出力エンジン。これにより、マ

イクロブラックホール砲や荷電粒子砲などの特殊兵装を運用可能。
ちなみに、火力という面では零式…改をも凌ぐ。
また、狙撃演算補助システムがあり、ファンネル的な兵装もある。

篠ノ之束

ヤンデレさん。佐野の研究を世に知らしめるためだけにISの製造を決めたある意味素晴らしい内助の功。現在は、姿を消しているが佐野とはこまめに連絡を入れているらしい。

織斑千冬

苦勞人。小さい頃から佐野と束という二人に振り回されていたためフォローが巧い。佐野のことは異性としても好きだけど、それよりも超えるべき壁として認識している。

織斑一夏

一級フラグ建築士。ただ、このSSでは鈍感なのは誘拐された際の影響で無意識に他人からの好意を拒絶している設定。ただし、根気よく頑張れば問題ない。ちなみに、シスコンではあるが軽いものである。ちなみに、ハヤテや慎吾、光太郎と同居していたため時たまその影響が出る。例えるなら、腹黒な面とか。ちなみに剣道はやっておらず、ハヤテと組み手をしているため、型にはまった剣道は以前よりも苦手になっている。

ここまでの設定（後書き）

修正があれば、その都度直していきます。

第1話 学園編開始（前書き）

どうでもいいことですが、慎吾の苗字を斑目に変更しました。確か、現実の厚木は地名でそこに軍の基地があったので、今後の展開次第では混乱するかも知れないので。

第1話 学園編開始

「ISとは篠ノ之束博士が作った機動兵器。ただ、元々は宇宙開発用のマルチフォーム・スーツ、と」

「そうそう。んで、何故か女性しか扱うことができないから過剰なまでの女尊男卑の思想が広まったというわけ。ただ、俺からすればなんでIS操縦の資格を持っていない女までも男を見下しているのか知りたいんだが。別に、女自体が偉くなったわけじゃないんだが」

「……お前、それ女子生徒の中でよく言えるな？」

「あ？ 俺は真実しか言っていないぞ？ というか、技術者とか整備士とかは客観的な視線を求められるからな。俺の知り合いの整備士たちも同じ考えだぞ？ 勿論、女もいるし」

IS学園の寮にある光太郎の部屋。教科書を片手に一夏にISの事を教えている光太郎。一夏は光太郎が女の園で堂々とそんな事を言うから若干居心地が悪い。

「それより、さっさと問題解けや。そもそもお前が、しっかりと基本的な部分を覚えていればこうなることもなかったんだよ」

光太郎は千冬より一夏に休み時間などもI Sの授業をするように言われている。せっかく、各国のI Sをいじれると張り切っていたのだが。ちなみに、光太郎は束と肩を並べる鬼才である佐野の弟子ということが知られているため、各国政府からすれば佐野とコネを作りたい・佐野や光太郎の技術が欲しい、などという理由により光太郎個人に限りI Sの調整などを許可している。光太郎は各国政府の思惑など知ったことではないため楽しみにしていたのだが……。

「だ、だって……電話帳と間違えて、な？」

「死ね。世界中の軍人さんたちに死んで詫びろ」

この目の前の少年はよりにもよって電話帳などと間違えて捨ててしまったのだ。光太郎は佐野について回って世界中の軍施設を回っていたため、一夏のしたことに怒りを覚えていた。といっても、昔から学校の女子からのあからさまな好意にも気付かなかったこの男は理解していない。例え、それが仕組まれたことであろうとも。

「あのな？ お前がいる『男でI Sを扱える』という地位は、世界中の男たちがそれこそ命をかけて欲しかった場所だ。全財産を捨てても欲しかった力だ。それなりの地位にはそれなりの義務が発生する。だったら、お前も死ぬ気でI Sの事を覚えろ。望んだ望まないに限らず、お前にはその義務がある」

「……」

「俺は師匠の：篠ノ之束博士と同等の頭脳を持つ『鬼才』佐野遼平の弟子だ。各国政府からこの学園にあるISの整備や改造を許可されているし、パスポート無しで世界の国々に行ける。その代わりに、いつ機密漏洩の罪で捕まってもおかしくないし、下手すりゃ師匠共々国際指名手配犯にされることも、暗殺される事も覚悟の上でこの地位にいる。お前はどうか？」

「俺は……」

一夏はまだ理解していないのだろう。まあ、自分程の修羅場もくぐっていないので仕方がないと思える部分もある。だが、これから一夏は自分の身を自分で守らなければならない。いくら千冬がいるとはいえ、結局は一人の人間。国には勝てない。佐野の名前を使って各国政府に働きかけているためこの場所にいられるのだ。下手をすれば研究所送りになってもおかしくはない。まあ、佐野曰く「そんな状況になればアレが放っておくとは思えん」とも言っていたが。とにかくこの男に自分がいる状況がどれだけ薄氷の上なのかを理解してもらわなければならない。

「だったら、千冬さんの名誉の為に、とかでも思え。お前の評価がそのまま実姉である千冬さんの評価になる。これは事実だ」

「――ッ」

光太郎は若干理解していない一夏に切り札を切った。なんせ、佐野と千冬が付き合っている事を知ったときに暴れた程のシスコンである一夏が、そう言われて呆けている人間ではないことを知っているから。ちなみに、今では落ち着いている。まあ、あの時は誘拐された直後だったし仕方のないこともあるのか？

「お前がISの知識がなければ、千冬さんの教育を疑われる。いいか？ 前準備が足りなかったなんて言い訳は通用しない。世の中結果だ。ISが世界最強の兵器として認定されたのも、ミサイルや戦闘機などを退けたという『結果』があったからだ。結果を残せ一夏の織斑千冬の弟は実姉にも引けを取らない男だと、さすがは世界最強のIS操縦者の弟だという結果を」

「おう！」

「（乗せやすい馬鹿で助かったあ）」

ちなみに、言っていることは真実である。ただ、下手にひねくれていると効果が全く無いので、そこは一夏の性格に感謝だろう。

「つか、お前の部屋ってどこよ？ 俺は別に同室でもいいが…お前がこの部屋に耐えられるかという問題だけなんだが？」

そう言われ一夏は部屋を見渡す。すでに、様々なISの部品がごちゃごちゃと散乱しており、油などの臭いが漂っており正直言ってここに遊びに来るのはいいのだが、住むということはしたくはない。

「あ、えっと…一応、場所は教えてもらっているから今からそっちに向かうよ」

「そうかい。ま、いつでも遊びに來い。それと、俺は実技面では教えられないことはないけど、技術面や武装性能とかだと本職だからな？」

「ああ。そんな時は頼むぜ」

一夏はそう言って部屋を出て行った。その顔は若干晴れやかだった。

「……さて、とりあえず、お茶出しましょうか？」

「あ、これはどうもご丁寧に」

「とりあえず、おまんじゅうを持ってきましたので、これも食べましょうか」

いつの間にか部屋にいたのは、このIS学園の生徒会長であり尚且つかウンターテロ組織『更識』の現当主更識楯無と、その婚約者兼忠犬兼奴隸兼人外高原ハヤテ。

「……あれ？　なんかすっごい余計な言葉が幾つかあったような」

「「気のせいでしょう」」

ちなみに、ハヤテは佐野の知り合いで光太郎も何回か会ったことがあるのだが、そのたびにノリで作った武装のモニターをしてもらっていた。その結果、人外という評価がくだされることになった。

「ところで、お二方。何か御用で？」

基本的に制服ではなくツナギで活動することを許可されている光太郎は、ツナギの上半分を脱いで腰のあたりで結ぶとお茶をすすり始めた。

「いえ、ただ単にご挨拶に来ただけですよ。多分、いろいろと協力してもらおうことになるでしょうし」

「師匠が言っていた組織ですか？」

楯無の言葉に光太郎は記憶を整理する。確か、何回か佐野を狙って襲撃を仕掛けてきた組織だったはず。

「いやあ、あんときは佐野さんと一緒に迎撃したけど……やっぱパイルバンカーは有効だな」

「……この人も人外だけど、佐野さんも大概ですよね？」

「まあね。この前アニメで見たんだけど、ハヤテ君はデビガン細胞に侵されていると思うの」

「……あゝ」

「ひどっ！」

ちなみに、そんな感じでグダグダなまま時は進んでいった。ところで、慎吾はというと。

「……お茶が美味しいですねえ」

「そうですねえ」

簪と一緒にお茶を飲んでいたりする。

「勝負ですわ！」

「やってやる！」

光太郎は目の前の光景に頭を抱えていた。昨日の今日でまさかこうなるとは思っていなかったから。というか、この場合は一夏のあらしい方が悪かった。代表候補生の事を知らないといった。昨日、あ

れほど注意したのに覚えていなかった。若しくは、あのイギリスの代表候補生セシリア・オルコットの上から目線にいらついていたのかもしれないが。どちらにしろ一夏がもう少しくましくあしらってあげばここまで事が大きくもならなかった。

「(せめてフォローしろよ)」

そう言つて幼なじみである箒をちらと見ると、一夏に嫉妬の目を向けていた。

「(……あのアマ。一夏のフラグ建築能力を知らんわけではないだろうに。確実にセシリア・オルコットは一夏に惚れるぞ)」

小さい頃から三人で遊んでいたし、佐野について世界中を回っていたから小学校も中学校もそんなに通えてはいなかったがそれでも知っている。あの男のフラグ建築能力を。

「……やつてられるか」

面倒だと言わんばかりに頭にタオルを巻いて教室を出て行こうとした。一応、クラスには所属しているが授業には出て出なくてもいい。というか、座学ならば学園1の知識を持つ。『鬼才の弟子』の肩書きは伊達ではないのだ。

「高槻君。どこに行くの？」

途中でクラスの女子に声をかけられたため、おどけて肩をすくめて教室を出ていこうとしたのだが、入ってきた千冬に捕まり強制的に授業をうけるように言われた。

「マジでやってらんねえ」

ボソッと呟いた声にチョークが飛んできたため工具入れから取り出したスパナで撃ち落としておいた。

第1話 学園編開始（後書き）

あとがきは次回で。

第2話 動く者、動くモノ

佐野と光太郎の研究室『蚩尤塚』。光太郎の強化外骨格と同じ名ではあるが、実際はこの名前のほうが先ではある。そこに、光太郎と千冬が立っていた。二人の前には一機のISが鎮座していた。

「千冬さん。とりあえず、白式に搭載できるだけの兵装を付けましたよ。といっても、一つですけど」

「左手のビームショットガンか」

光太郎が提出したデータを見ながら千冬は呟いた。左手のひらに搭載されたビームショットガン。牽制用ではあるがこれでなんとか遠距離にもある程度対応はできる。

「ま、ミサイルとかを撃ち落とすくらいはできます」

だが、シールドを削ることはできないだろう。まあ、それは仕方ないとして諦めてもらうしか無い。

「それより、遼平の行方を知らんか？」

IS学園の整備科にとっては夢の国とも言える蚩尤塚。ここに入れるのは、それこそ整備科のクラストップ3に入っているだけの力を持つ女子だけ。例外は、一夏と生徒会メンバーと教員たち、ハヤテや慎吾といった者たちだけ。基本的に、佐野はここにこもっているのだが、千冬が入ってきたときにはもういなかった。

「多分、ハヤテさんたちの所だと思いますよ？　新しいインプットカードを渡しに行くらしいです」

「あいつが自分から？　雨でも降るんじゃないか？」

「いや、あの人は結構自分で動いてますよ？」

ただ、前提条件として『興味を持っている事柄』が必要だが。まあ、とにかく佐野はここにはいない。

「まあいい。奴が帰ってきたら職員室に来てくれと伝えてくれ。いろいろと離しておきたいことがあるからな」

「了解です」

休日なのに忙しいことだと思いつながら机の上のコップを掴む。

「コーヒー無し、か」

「お茶でよければあるよ？」

横から渡されたのは緑茶。顔を向けるとそこには布仏本音がいた。整備科一年の主席でもあり、『更識』繋がりで見識のある彼女がここに入り込むのも結構ある。

「よ。つか、いいのか？ 一応、簪の侍女だろ？」

「そうなんだけどね。シンさんと一緒に出かけているし」

お茶をすすりながら簪を思い出す。確か、慎吾に懐くようになったのは楯無の婚約者になれなかった腹いせに簪を襲おうとした馬鹿をブチギレた慎吾がその馬鹿の『身体中の関節』を撃ちぬいて助けたくらいから？

「いやあゝあの時はシンさん怖かったよね」

「普段敬語のあの人がヤクザ並の口の悪さになっていたからな」

濃い目のお茶を飲んだせいなのかその時のことを思い出したのか渋い顔をする光太郎。

「そういや、そっちというか女子からみて一夏はどうよ?」

「うゝん。人気だよ? おりむーはジャニーズ系だしね。あ、こたろーも人気あるよ?」

「勝手に人の名前を変えるなよ」

本音のよく分からないニックネーム。ハヤテは「ハヤ太さん」。慎吾は「シンさん」といった感じである。まあ、佐野に妙な名前を付けないのは身の危険を感じ取っているのだろうか? 佐野は気にしなさそうではあるが。

「ただ、もうちょっと女心を理解してもいいんじゃないかなあ?」

「それは育ちやらなんやらで仕方のない部分がある。むしろ、誘拐の件で歪まなかっただけでも儲け物だろ」

「うゝん」

やはりそこら辺は男と女で考え方が違うのだろう。ただ、光太郎自身が佐野に影響されているため自分を基準にしているのかは分からないが。

「つーか、簪のI Sの整備とかやってんのか？」

「あゝ実は、やってないんだ。というか、やらせてもらえていないというか……」

「また、簪の悪い癖か」

簪は昔から他人に頼ることをしていない。それがコンプレックスから来ることなのは知っている。姉でありシスコンでもある楯無は自分が原因でもあるため物陰から見守るだけ。ハヤテや慎吾は任務やらなんやらでいないことが多いためノートタッチ。となると、本音くらいしかそばにすることが難しいのだ。ちなみに、光太郎は頼られたら手伝うが、そうでなければ話しかけることはないという受身のスタンスである。

「ま、無茶しすぎないように見ておいてやれ」

「こたろーも協力してよー」

「分かった分かった」

白式の調整をしながらおざなりに返事をする。どうも最近、佐野の言動が移ってきた気がする。

「……本当に佐野博士に似てきたね」

「ま、血の繋がりはなくてもあの人は俺の親だし。影響受けるのは仕方ないだろ」

ひと通りの調整を済ませると椅子から立ち上がって体を伸ばす。背骨から凄まじい音になった気がするが気にしない。

「さて、と。飯でも食いに行くか「連れてけー」……おい」

「さ〜。いこ〜」

背中に抱きついてきたので思わずおんぶの形で背負う光太郎。傍から見れば、身長とかの関係で兄に甘えている妹の図である。まあ、とにかく。

「頼むから、ツツコミでスパナを使うなよ？」

「じゃあ、ドライバー」「もっと駄目」「ちえゝ」

ため息を吐きつつも本音を背負いなおして食堂へと向かう光太郎。途中で、一夏や箒と合流して一悶着あった。一夏のフラグ的な意味で。

その日、トレーニングルームには光太郎、一夏、箒の姿があった。

「いいか？ 左手の装備はマジで牽制用だ。精精、ミサイルを撃ち落とすだけだ。それと、セシリアのISの注意するのは『BT兵器』だ」

「ビューティー兵器？」

「箒」

「ああ」

「あべしっ！」

そして、実際に白式を装着しての訓練などを行っている。教師は光太郎。補佐として箒がいる。セシリアのIS『ブルー・ティアーズ』の説明を現在行なっているところである。

「独立移動型射撃兵装…ま、お前に分かりやすく言えば「ファンネル」とか「ビット」だ」

「あゝ」

一夏が分かるように説明しているのを見ると、教師みたいだと思うのは箒の談。そして、一夏には実際に動かすように告げ、箒を連れてモニタールームへと入ってきた。

「光太郎。しかし、一夏に付け入る隙はあるのか？」

「ある。というか、師匠やハヤテさんとか慎吾さん並のバケモンじ

やなければ、BT兵器を使う際は他の行動が取れない。並列思考な
んざやれる人間のほうが少ないからな。まあ、予め軌道設定をして
おけば問題ないが……まあ、ヤル奴はいないわな」

「何故だ？　そうすれば戦いやすくなるだろう？」

一夏は必死に白式に慣れるために空を飛んでいるため無視。その間
に箒の質問に応えておく。

「弱点として同じ動きしかできない。一応、ランダム軌道設定もあ
ることはあるが、それだと今度はどこに飛ぶかわからないからな。
実際に使う奴はいない」

「なるほどな。つまり、BT兵器を動かしている間はそっちに集中
すればいいと？」

「まあな。ただ、若干タカビーとは言え代表候補生だ。未完成とは
言え、並列思考を会得している可能性はある」

まあ、あの激昂しやすい性格だとそれも杞憂だと思う。伊達に佐野
について世界中を回った結果趣味が人間観察になっていないのだ。

「まあ、ああいうタイプは『男は弱い生き物』という先入観がある。

そこを突いていけば勝てるはずだ。ま、一夏ならそのまま惚れられるというおまけがつく」

「なに!？」

「……お前も相変わらずだなあ。アイツが女子に惚れられるスピードの速さを分かっているはずだろ」

「う……」

箒が転校していった後もフラグを立ててきた男だ。今回のことをモノにしないはずがない。まあ、一夏自身は無意識だろうけど。

「つーわけで、お前が一夏に本気で惚れているならアプローチをしろ。でなきゃ、横から持っていかれるぞ? ちなみに、お前が転校して行った後にできたアイツいわく「セカンド幼馴染」の中国人少女がいる。そいつも、中国に帰っていったが別れ際に告白していった。まあ、アイツは気付かなかったが」

「だ、だが外国人なのだろう!？」

すごく焦っている箒においうちをかける。光太郎は内心で毒づく。嫉妬している自分に。仮にも初恋の少女だ。ここで追い詰めて諦め

させて自分に〜という考えが思いうかぶことが気に入らない。佐野に言わせれば「興味を持っているなら仕方が無いだろう」というだろうが。

「その少女はファン・リンイン鳳鈴音といって現在中国のIS代表候補生だ。ここま
で言えば言いたいことは分かるな？」

「日本に…IS学園に来る」

「そゆこと。つーわけで、もちっとアプローチをかけろよ？」

その言葉が言い終わるとともに一夏が部屋に入ってきたため、白式を受け取ると一夏と箒を帰した。自分は、あともう少し仕事が残っているのだ。

「さあ……さっさとハッキングしてこいよ？」 『亡国機業』

モニターには量産型強化外骨格『陽炎』と表示されているデータが不気味に光っていた。そして、モニターにハッキングを受けているメッセージが表示された。光太郎はそれに対抗するわけでもなく携帯を取り出すと佐野に連絡を入れた。

「――師匠ですか？ ええ――亡国機業が陽炎のデータを盗み

出しました——はい——分かりました」

電話を切ったのとハッキングによるデータの吸出しが終わったのは同時だった。

「……ま、裁きは受けるさ……いずれ、な」

この行動がどれだけの人間を殺すのかも自覚している。『陽炎』は『零式…改』をデチューンしまくって作り上げた鎧。性能的には、誰にでも装着できる『ラファール・リヴァイヴ』と言ったところだろう。それをテロリストに渡せばどうなるかも分かっている。

「だが……俺も『鬼才』『狂人』の弟子なんだ……」

もっと思ってみたいと思う。強化外骨格やISにより齎される『技術』が。佐野が『自分の興味のあることに執着する』人間ならば自分は『技術に執着する』人間。

「クッククック……」

静かに笑う光太郎。だが、その姿は師と崇める佐野の姿に酷似していた。

「こたろー……」

そして、それを物陰から悲しそうな目で見つめる本音の姿があった。

第2話 動く者、動くモノ（後書き）

一夏サイドは基本的に原作と同じなので描写はしません。そして、最後の部分ですけど、そのうち説明すると思います。うん。そして、なんかのほほんさんが……。これでもいいっか。

ちなみに、光太郎はのほほんさんとフラグを考えていたりします。慎吾はまだ不明。個人的には、簪かナターシャさんのどっちかかなあ…と妄想してみたり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8564s/>

IS＜インフィニット・ストラトス＞～アナザーストーリー～

2011年5月20日14時30分発行